

11 石田梅岩ばいがん 心学の祖

亀岡市

封建社会の厳しい身分制のなかで、町人とりわけ商人に自信を与え、誠実な商人の道が「人の人たる道」につながることを力説してやまなかった石田梅岩の学問とその思想は、後に「心学」とよばれるようになりまし。

貞享二年（一六八五）の九月十五日、亀岡市東別院町東掛（丹波国桑田郡東懸村）の農家に生まれた石田勤平は十一歳のおりに京都の商家へ奉公しました。しかし十五歳のころに帰郷し、二十三歳の時に再び京都の商家（黒柳家）に奉公しました。仕事のかたわら勉学につとめ、「隠道」の学者であった小栗了雲との出会いによって、勤平の学問はよりいっそう充実するようになりまし。

そして享保十四年（一七二九）、京都の車屋町御池上るで講義をはじめました。時に勤平（梅岩）は四十五歳でした。開講にあたって「席銭入り申さず候。無縁にても御望の方々は、遠慮なく御通り、御聞成さるべく候」の掛行燈をかかげたことは有名です。そして「女中がたはおくへ御通り成さるべく候」とも書きそえました。聴講無料で出入り自由、しかも女性の聴講を歓迎したことは、当時においては画期的なところみでした。

「学問の至福をいうは心を屈し性を知り、性を知れば天を知る」（「都鄙問答」という「心学」の教えは、神道・儒教・仏

教への深い造詣を背景に具体化しましたが、それはこのころの教育であり、このころの経済であり、このころの経営を力説する学問でした。

荻生徂徠が「商人は不定なる渡世をする者」とさげすみ「商人の清るることをば嘗て構うまじきなり」（「政談」とみなし）たり、林子平が「町人と申し候は、只諸人の禄を吸い取り候ばかりにて、外に益なき者に御座候。実に無用の殺つぶしに之あり候」（「上書」）などと述べた町人観とくらべて、石田梅岩の「商人の道」は傑出していました。「何をもちて商人ばかりを賤め嫌うことぞや」と批判し、「我が教ゆる所は、商人に商人の道あることを教ゆるなり」、「富をなすは商人の道なり、富の主は天下の人々なり」（「都鄙問答」）と説きました。

正直を重んじ、「倅約」の必要と「形による心」のありようを指摘したその思想は、日本型経営理念を提起した先駆的な卓見でした。石田梅岩は延享元年（一七四四）の九月二十四日六十歳で亡くなりましたが、「人の人たる道」（「人権の道」を探求したその生涯には学ぶべき内容が秘められています。

（上田正昭）



石田梅岩の生家

メモ●「石田梅岩の生家」は、JRI山陰本線亀岡駅より車で約30分